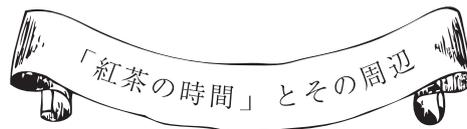


# きもちは、 言葉を さがしている



## 第8話

水野 スウ

### 出前紅茶@クッキングハウス

東京調布のレストラン、クッキングハウスは、10数年前からずっと、私にとってのとくべつな“学校”だ。そこは、心の病気を体験した人たちが、仲間とごはんをつくり、一緒においしく食事することを通して、元気と自信をとりもどしていける場所。レストランにやって来たお客さんも、クッキングハウスのメンバーとともにコミュニケーションの練習ができる場所。

ランチの後、長居をして、対人関係を練習するSSTやサイコドラマの勉強会に参加して帰る、という人が少なくないけど、まさに私もその一人。週一オープンハウスの「紅茶の時間」を続ける中で、私自身もっとメンタルヘルスについて知らなきゃ、とすごく思ったし、コミュニケーションの学びを深める必要性も痛感して、この不思議なレストランに、石川からたびたび通うようになったのだった。

そうやって調布に通ううち、いつしか私が、

クッキングハウスからお話の出前注文をいただくようになった。はじめて出前したのは8年前。この連載のタイトルでもある「きもちは、言葉をさがしている」という本を出した後、代表の松浦幸子さんから、メンバーやスタッフ、そしてお客様たちに新しい本のことを話してくださいね、とご注文を受けたことからだった。

以来毎年、今では恒例になった、4月の出前紅茶@クッキングハウス。昨年までのラインアップは、こんなふう。

- ・きもちは、言葉をさがしている
- ・憲法のおはなし①・憲法の主語は私たち編
- ・憲法のおはなし②・憲法改正もぎ国民投票編
- ・私のこころの旅
- ・「ほめ言葉のシャワー」から平和へ
- ・「ほめ言葉のシャワー」から春風のプレゼント
- ・「いのみら通信」の由来

4回目をのぞいて、話すテーマはすべて、松浦さんからのリクエストによるもの。本当になんて、

注文の多い料理店だ!(笑)って思うと同時に、「スウさん、次はこれをお願いします」と提示されるどのお題も、その時々私の関心事を的確にとらえたものばかりで、松浦さんの目のつけどころというか、日ごろから私をちゃんと見てくださってるのが感じられてうれしく、いっそう、自分が今、語れることを誠実に身の丈で語ろう、と思えてくるのだ。

「ほめ言葉のシャワー」というのは、クッキングハウスの学びにヒントを得て、8年ほど前から自分なりに展開しているお話とワークショップのテーマのこと。

出前の最後に、「あなたが言われてうれしい言葉はなんですか」と問いかけて、その場のみなさんが出してくださった言葉たちがあまりにすてきだったので、娘との協働編集で、同名のちいさな冊子にもまとめた。

3年前の出前では、その「ほめ言葉のシャワー」と平和がどうつながっていくのか、というリクエストをいただいて、娘と私とでそれぞれに語った。

7回目に登場した「いのみら通信」。これは、チェルノブイリ原発事故の翌々年から今に至るまで、細ぼそと出し続けている手描きの個人通信の呼び名。その本名が、「いのちの未来に原発はいらぬ通信」というのを知っていた松浦さんから、3.11後の翌月の出前には、ぜひその通信の由来を聞きたい、とご注文をいただいたのだった。

さて、この春のお題は、「心の居場所の原点」。

今年で29年目の紅茶、この12月で満25周年を迎えるクッキングハウス。こちらがたまたま先にはじめていたとはいえ、紅茶は水曜の午後だけ、つまり週休6日の、ちっともはやっていない、ただあいている、というだけの場所。クッキングハウスは週休1日の、全国からお客さんがみえる本物のレストランで、同時にメンバーさんたちの、職場で、居場所で、学びの場で、さらに訪問者の私たちにとっても、安心感や様ざまな気づきをプレゼントしてくれる場所で。

と、もともととても同列になんて語れっこない

のだけでも、それでもどこか互いに共通するもの／ことがある、と松浦さんが感じてくださっての、たぶんこのお題なのだろうなあ。そう思いながら、私自身、それを探しにいくつもりで語り始めた。

## 居場所の原点、私にとっての

居場所の原点、と問われて、まっさきに思い浮かんだ一つの場所があった。

たくさんの人から、どうして紅茶の時間をはじめようと思ったの?と訊かれるたび、「一緒に子育てする仲間がほしくてね、ただそれだけの理由で」と、私はいつも同じ答え方をしてきた。それはそれでできとあってると思うのだけでも、20数年ぶりに東京銀座のあるお店を訪ねて、そのお店の中に立った時、あ、ひょっとしたら、ここがはじまりだったのかも!といきなり時計が逆回りしはじめた。一気によみがえってきた、40数年前の感情と記憶。あの頃の私にとって、あそこってほんとはとくべつな場所だったんだ。

中学2年から3年にかけての半年間に、母を亡くし、兄が自死し、その後しばらくの私は、自分の人生の中で一番、心があぶなっかしかった時代だ。

わが家だけがほかの家庭とまったく違って見えて、なんで?なんで?と、胸の中で、怒りながらうねりながら、叫び続けていた。だけどその、なんで?は、学校でも家でも、表には決して出さない。その分、貯まっていくぐちゃぐちゃのきもちも、いつも紙の上に吐き出してた、鉛筆の芯が折れるほどの強さで。

今思えば、どのうちも違っているのが当たり前だし、またどの家庭にも外からは見えないそれぞれのブラックボックスがあるにきまっている。だけどあの頃の私に、そんなぐるりの風景は全然見えてなかったなあ。

私が高校1年生の時だったと思う。少し風変わりなところのあるボーイフレンドが、ある日、私を銀座の小さな画材屋さんに連れて行ってくれた。当時は帝国ホテルにほど近い、泰明小学校の真向

かいのビルの一部、ラッパのようなホルンのマークが目印の、そのお店だけがまわりとは明らかに違う空気。それが月光荘画材店だった。

天井からは貝殻やモビールや、麦わら菊や紅花のドライフラワーの花束がいくつもぶら下がり、床には、かつて海に浮かんでいた巨大なガラスの浮きだまや、蒸留水用だろうか濃い緑色の大きなガラス瓶、子どもならずっぽりはいりそうな花瓶、などがところ狭しと置かれていて、16の私は見るものすべてで目が☆になり、いっぺんでその場所に夢中になった。

絵の具や絵筆や鉛筆や画板や大中小サイズのスケッチブック、といった描く人のための必需品がずらりと並んだ横に、ちいさいドットのついた便せんやら、詩が添えられたポストカードやら、それに何より日記帖にうってつけの薄手のノートブックよりどりみどり！ 実際あの日以来、私の日記帖になった月光荘ノートは、どれだけその後の私のきもちの吸いとり紙になってくれたことだろう。

それからは一人でも、用などなくても、何も買わなくても、私は銀座のお店にあしげく通った。行くたびに、店主である、白髪ふさふさ頭の月光荘のおぢちゃんが、鼻眼鏡の奥からぎょろりと私を見つめて、「お～、お前か、よく来た、よく来たな」と言っでは、私を好きなだけそこで長居させてくれた。

今でこそ私は当たり前のように、場、とか、居場所、とか口にしていて。けどあの頃はそんな概念も言葉も、まだ自分の中にはなかった、かけらほども。でもね、ふりかえれば確かにあそこは、まぎれもない私の「居場所」だったんだ。

## 月光荘のおぢちゃんがしてくれてたこと

学校という場で、私はだいたい浮いていたと思う。水野さんって変わってるよね、とよく言われたし、実際まわりと違っていたし、自分でも相当ヘンかも、と思っていた。そういう私に、おぢちゃんはいつも、何度でも、お前はお前でいいんだよ、というメッセージを直球で送ってくれていたこと

を思い出す。

まだ海のものとも山のものともわからない、たかだか15、6の女の子が、人生70年近くを生きてきたおぢちゃんから、ちっぽけな存在ながら丸ごと認められる。「おまいさんは、ほんとにおもしろいなあ～、いい、いい」と、おぢちゃんがうなずきながら言ってくれるたび、へえー、こんな私だけど、私は私でいいのかな、私にも何かきつといいところがあるんかも……みたいなきもちにさせてもらえる、月光荘はいつもそんな場所だった。

ごくごく若い時期に、信じてもいいと思えるおとなに出逢い、そのひとからOKをもらえる、受け入れてもらえる。それがその子の中にどれほどのちからを育ててくれることか。長いこと紅茶の時間をしてくて、そのことの意味を今、痛いほど思う。

そうだったんだ、おぢちゃんは毎回毎回、ものすごいことを私にしてくれてたんだね。父とほぼ同じ年の明治生まれ。父に対してははるかな距離感があったのに、このおぢちゃんとのへだたりのなさはいったい何だったのだろう。

やがてこのおぢちゃんが、日本の画壇の名だたる人たちからも信頼されている絵の具職人であり、与謝野晶子さんがお店の名付け親であるという月光荘画材店の、創業者+店主であり、数々の伝説を持つてるひとだったことが徐々にわかってきたけど、おぢちゃんと私の距離はまったく変わることがなかった。

おぢちゃんのこと大好きだったから、お店のカタログづくりのお手伝いを頼まれることは何にもましてうれしかった。学生の時に自費出版で出したはじめての詩集をお店においてもらえたことも、私にとってなんとおおきなご褒美だったろう。

でもほんとはもっと深い意味があったんだ。あの時期におぢちゃんと知りあえたこと、そのままの自分で居させてもらえて、来たい時にはまた来ようと思える、あの場所が私にあったこと。そのおかげで、私は、自分が一番私らしいと思える部分をずっと好きでい続けられたんじゃないかなんか。

通っていた十代のころは漠然としかわかってなかったことを、おとなになった私が、月光荘の懐かしい空気の中に身を置いたとたん、確かなものとしてそう思えた。それと同時に、「紅茶」という場の原点の一つがここにあったことにも、あらためて気づかされたんだ。

## 次に渡す

私は紅茶で出逢う人たち、とりわけ若い人たちに、まだそのひと自身は知らないまま持っているとくべつな something を、できるだけ伝えたい、ってずっと思ってきた。それって昔々に、少女だった私がおちちゃんにしてもらってたことだったんだ。

月光荘おちちゃんが亡くなってからもうずいぶんの年月がたつ。直接のありがとうはもう返しようがないけど、私がもらった分は、今とこれから先に出逢う次のひとたちに手渡ししながら返してゆこう。pay it forward、他の誰かに違うかたちで先贈り、ってきつこういうことなのかもしれない、と今は思っている。

半世紀も前からの月光荘おちちゃんのご縁があったおかげで、「ほめ言葉のシャワー」の冊子も、現在、銀座のお店におかせていただいている。

昨年の夏はその月光荘のギャラリーに、親しい紅茶仲間が遺した「ちきゅう」キルトや「よだかの星」のキルトをかざり、娘が創ってきたこれまでの小冊子や紙もの雑貨をならべ、私は亡き友のキルトの前で原発を語る、という「つながる3人展」までひらくことができた。

何枚もの深い想いのキルトたちに囲まれたギャラリーの、「ちきゅう」キルトの前で、3.11 後に思う原発のこと、いのちの未来に寄せる想いのこと、そして過去の、月光荘おちちゃんとの出逢いのこと、などを語りながら、私のはっきりと気づいたことがあった。それは、この「つながる3人展」が、実は3人だけじゃなかったんだね、ということ。目には見えない、けど確かな存在として、月光荘おちちゃんともつながっての、これは「つながる4人展」だったんだ……と。

## クッキングハウスに行ったわけ

そもそもどうして私がクッキングハウスに行こうと思ったのか。

それは、様々な悩みや不安をかかえて紅茶の時間にくる人たちの話を、知識も経験もあまりない私のようなものが聴き続けていて、はたしていいものかって、一時期、とても不安だったからだ。

このまんまじゃいつか、私は紅茶を嫌いになっちゃいそう。私がおだやかなきもちで紅茶を続けていくためには、私にとって何か依りどころになる、芯のようなものが、必要だったんだと思う。ちょうどそんな時期に松浦さんと出逢って、それからすぐに東京のクッキングハウスを訪ねたのだった。

松浦さんの、誰に対してもいつも変わらない、「よく来てくれましたね」と人を迎える態度、話の聴き方、受けとめ方、耳の傾け方、わたしメッセージのきもちの伝え方、松浦さんのその在り方を支えている信念のようなもの、などなど。クッキングハウスに通えば通うほど、私の中に不思議な安心感が育っていくのを感じた。

紅茶は紅茶なりに、続けていくことにきつと何かしら意味があるんだ。知識よりも技術よりも、まっすぐな耳で人を聴き、その人の存在・beを受けとめることを、はやらない紅茶だからこそ、もっと大切にしていけば、それでいいんじゃないか。まだまだ私に足りない経験は、紅茶の時間をそのきもちで続けていけば、きつと自然に積み重ねられていくもの。

そんなふうになんかだんだんと思えてきたのが、自分なりにわかった。そして少しずつ、聴くことが前ほど怖くなくなっていく自分を、紅茶の中で、仲間の中で、発見していった。

## 聴くことの贈りもの

私にとって誰かを聴くということは、その人がこれまで生きてた人生の物語を、ほんの少しおすそわけいただくことで、それは同時に、私を映す多面体の鏡を育て、また、私の想像力を育てるこ

とでもあった、と前回のマガジンに書いた。

そして実際、たくさんの、しんどいきもちや、もう生きていたくないという人たちのきもちを聴いてくる中で、ある日ふいに、私ははっとしたんだ。若くして死を選んでしまった兄はあの頃、いったいどんなきもちでいたのだろう、兄の話を聴いてくれる誰かが、心に寄り添ってくれる誰かが、あの頃の兄の近くに一人でもいたのだろうか、と。

十いくつかの少年だった兄を連れて父が、母と再婚し、私が生まれた。気が強くていつも前向きな母と、幼い頃に実母を亡くした、どちらかといえば内向き傾向の兄とは、なかなかそりがあわなかったらしい。

家の中には常に書生さんと呼ばれる他人がいて、父が面倒をみている、兄とは同い年の郷里のいとこも同居していて。後になってそのいとこから聞いた話では、はたちの頃の兄はよく、10日ほどふらっと家からいなくなるとは戻ってくる、という短期家出をくりかえしていたみたいだ。

今はもう80歳になるいとこが、当時の水野の家をふりかえって、「あの家には、彼の居場所というもの、きつとどこにもなかったんでしょねえ……」と、哀しい目で言った時、私は胸がずきんとした。兄にとってのあの頃のわが家の空気、というものが、いとこがふと口にした「居場所」という単語から、よりリアルに私にも想像できてしまっている。

結婚して、家を出て、そこが兄の、居場所になるはずだったけど、結果としてはそうならなかった。幼すぎた私は、兄のきもちをほんのちょっとだってわかろうともせず、兄のしたことを、どうしてあんなことしたの？ なんで、なんで？ と問うふりをして、心の中でずっと責めてばかりいたなあ。

いろんな人の人生の物語を聴かせてもらってきて、やがて、私は兄のきもちがどんなだったか、遅ればせながら少しずつ想像するようになった。そのうちに、亡くなった兄を責めていつまでも赦そうとしない、そんな私でもういたくない、と思

えてきた。だってそれは、亡くなった兄の存在・beを、認めずに否定し続けてることだし、亡き人に対してのものすごく残酷なことじゃないか、と思えたから。

そこにやっとたどりつけたのは、間違いなく、たくさんの人が私にわけてくれた人生のpiecesのおかげだ。兄の死をそのように受けとめ直せたことは、「話す」よりもずっとbe的な行為に思える、「聴く」ことから私が受けとった、何よりの贈りものだった。

そんなきもちの過程を経て、兄の死後、40年も経ってからだったけど、私は義姉とはじめて、兄の死について語りあえた。その姉に対しても、どうかもう、これ以上自分を責めないでね、どうか自分を赦してあげてね、と心から伝えることができた。聴くことがいつまでも怖いままの私だったら、姉との、魂に響く対話なんてとうていありえなかった、と今でも確信している。

## Wonderが、またまたいっぱい

この日のお話の出前紅茶「心の居場所の原点」@クッキングハウスは、実はまだまだ終わらないので、続きはまた次号で。でも、ここで閉じる前に、出前当日、こんなサプライズがあったことだけは、やっぱり書き記しておきたいと思う。

私の話が終わったあとで、一番はじめに感想を言ってくくださったのは、その日一番遠く、岩手からみえたというすてきな女の方だった。

この日はじめてレストランに来て一人でランチをし、今からお話会がありますからよろしければどうぞ、と初対面の松浦さんに声をかけられて、話の始まるぎりぎりの時間に、ほんとにたまたま、とびこみで参加してくださったのだ。

その彼女が言ったこと。「座ったとたん、もう涙、なみだ、でした。私が20代の時、おつきあいして結婚まで約束した恋人がいましたが、彼のお勤めしていたところが、今日のお話のはじめに出てきた月光荘だったんです。その彼が事故で亡くなってもうじき34年目、しかも明日は私の誕

生日。今日はまさしく、その彼に導かれてここに  
来たとしか思えません」

会場のクッキングハウスに、ええ～～！ って  
驚きの声があふれた。私も、聞いておもわず鳥肌  
が立った。こんなことが、こんなことって、ある  
んだろうか、でも、あるんだ、ほんとに、実際に、  
あるんだね。

いつもいつも思う。生きてることは、生きてく  
ことは、不思議がいっぱいだ。

うれしいも悲しいもびっくりも素敵もなみだも  
感動も怒りも切なさも美しさも空も風も心も、

wonderがいっぱい、wonderでいっぱい。  
Wonderfulという言葉の持つ本来の意味は、きっ  
とそこからきてる、と私は思っている。

そういう毎日毎日を、私たちは生きているんだ。  
そのことを、いつも以上に強烈に感じた、この日  
の出前紅茶@クッキングハウスだった。

ではでは、居場所の話の続きを、また次号で。

to be continued.